末流是に玄たがふ、

〔十種香暗部山〕凡例

一香をもて遊に、組香と名付もの、其品わかれて多種あれども、いにしへより今に絶ずおこなはるゝは十種なり、所謂十炷、宇治山、小鳥、小草、競馬、矢數、名所、花月、源氏、連理也、今此書に用て玄るすも又十種なり、

一十種の外に外組といふ香すくなからず、所謂無試十炷、燒會十炷、古今、六義、源平、吳越、花車、鶯、初音、郭公、鳥合、鬪鷄、蹴鞠、星合、新月、四節、烟競、忍香、四町、御幸、宇治香、別花月、別名所、三夕、住吉、芳野、玉川、系圖香三種乃至七種等なり、此外心々にこしらへ家々に傳ふるもの、記すにいとまあらず、然れ共風流餘情にかゝはり、其理つくさゞる事あれば、童蒙にわたらず、且わずらはしき方もあれば、此書にまじへ加へず、格そなはり事すなほにして、此門に入德ある事は、唯此十種の内にこもれりと知べし、

一十種の内に勝れたるは十炷なり、世に香合のたぐひを、すべて十炷香とのみいひて、十種の内又十炷の名ある事を、わきまへざる人おほし、是此道にうとく、又字韻同じ故成べし、十種といふは總名にて、十炷は別名と知べし、

一香本と云事、いにしへより火本といひて、近世までにおよぶを、聞よろしからずとて、或師會毎におしへて、香本といはしむるより、やう〳〵いひなれもて行、今是に習へるはむべなり、○中略

一香の作法は、はじめの十炷に大概を玄るし、十炷以下の香には略せり、前後をはかりて知べし、その香毎につきて故實あれども、所々にあらはさばことにまぎれて、其香の組やう、きゝやう、意味おそらくは心得がたからんか、此道に志す人は常にたづね習べし、

一香會興行、香席賓主の用意、諸具のこしらへやう、同寸法、別ては香本の手前、たとへば諸禮茶の